③「特別の教科　道徳（道徳科）」の評価

Q　「特別の教科　道徳（道徳科）」では、何を評価するのだろうか。

A

道徳科の評価　（評価の公的な文書である「指導要録」の場合）

道徳科における評価は、道徳科の授業を行った結果として見られた**学習状況や道徳性に係る成長の様子を評価**して記載します。

挨拶の姿や友達との関わりなど普段の学校生活で見られる行動については、指導要録の上では、「行動の記録」として記載します。

道徳科の授業で評価すること

〈育成するもの〉
道徳性
目に見えない内面的資質

- ○道徳的判断力
- ○道徳的心情
- ○道徳的実践意欲
- ○道徳的態度

〈評価するもの〉
道徳性につながるような
目に見える**学びの姿**

- ○多面的・多角的な見方へと発展しているか
- ○自分自身との関わりの中で深めているか

※道徳性を養うことを目指しますが、**道徳性は目に見えない**ため、養われたか否かは、**容易に判断できません。**
※授業の指導のねらいと評価の視点は異なります。

○多面的・多角的な見方へと発展している例
- ねらいとする道徳的価値の様々な面を考えている。
- 道徳的価値を支える様々な根拠を考えている。
- 様々な登場人物の立場で考えている。
- 自分の考えと友達の考えを比べて考えている。
- 時間の経過とともに変化する状況等を考えている。
- 人間の強さや弱さ等を捉えて考えている。など

○自分自身との関わりの中で深めている例
- 教材の登場人物に自分自身を置き換えて考えている。
- 教材の問題点等を自分のこととして受け止めて考えている。
- 日常生活や学校生活等を想起しながら考えている。
- 自分の生活を見つめ、思い返しながら考えている。
- 自分だったらどうするかなどを考えている。など

道徳科の授業での発言や記述等を通して、**目に見える学びの姿**を評価します。

大くくりなまとまりを踏まえた評価

個々の内容項目ごとではなく、学期や年間といった**一定のまとまりで**、児童生徒の成長の様子を**継続的に**見ていきます。

★道徳科の評価のポイント★

①数値による評価ではなく、**記述式**です。
②**他の児童生徒との比較ではなく**、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて、認め励ましていく**個人内評価**です。
③児童生徒が、
「より多面的・多角的な見方へと発展しているか」
「道徳的理解を自分自身との関わりの中で深めているか」といった点を重視します。
④個々の内容項目ごとではなく、学期や年間などの**大くくりなまとまり**を踏まえて評価をします。
⑤調査書に記載して、**入学者選抜の合否判定に活用することはありません。**

2 実践事例

⑴ 小学校

① **低学年・第１学年** …… 6
内容項目：A-(5)　希望と勇気、努力と強い意志
教材名：「ぼくのゆめ　―大前光市さんといっしょに―」
（光文書院『小学どうとく　ゆたかなこころ　２年』）

② **中学年・第３学年** …… 10
内容項目：C-(12)　公正、公平、社会正義
教材名：「みさきさんのえがお」
（東京書籍『新編 新しいどうとく３　気もちがわかると、気もちがかわる』）

③ **高学年・第６学年** …… 14
内容項目：D-(19)　生命の尊さ
教材名：「生命のメッセージ」
（光文書院『小学どうとく　ゆたかな心　６年』）

⑵ 中学校

① **第１学年** …… 18
内容項目：C-(16)　郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度
教材名：「震災を乗り越えて　―復活した郷土芸能―」
（日本文教出版「中学道徳　あすを生きる①」）

② **第２学年** …… 22
内容項目：D-(19)　生命の尊さ
教材名：「命を見つめて　―娘資繍さんの六百四十六日―」
（日本文教出版「中学道徳　あすを生きる②」）

③ **第３学年** …… 26
内容項目：B-(6)　思いやり、感謝
教材名：「指むすび」
（日本文教出版「中学道徳　あすを生きる③」）

主題名　郷土芸能を伝える
教材名　「震災を乗り越えて一復活した郷土芸能―」
（日本文教出版［中学道徳　あすを生きる①］）

主題構成表

■内容項目
C―(16)　郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度

郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。

■価値の分析
- 郷土とは、自分の生まれ育った環境に伴う精神的なつながりがある場所を示し、伝統とは、長い歴史を通じて思い伝えてきた精神的な在り方のことである。
- 現代の日本では、都市化と過疎化が進行し、郷土に対する愛着や郷土意識が希薄になる傾向が見られるが、地域社会は家庭や学校とともに生徒にとって大切な生活の場である。
- 地域社会には、長い間維持されてきた独自の行動様式や文化型式があり、地域の方と交流をもつことを通してそれらに触れ、文化型式がある認識を深め共同することで地域社会の成員としての公共性を身に付ける。

■内容項目から見た生徒の実態
- 地域で行われる様々な行事やお祭りに積極的に参加する生徒が多く、地域のよさや良かさを実感している。
- 地域で行われる行事にどんな意味や伝統があるのかを知らず、何となく行事に参加している生徒もいる。

■要因
- 地域の方との交流が限られており、郷土に対する愛着や郷土意識が希薄になっている。
- 「気軽に楽しみたい」「あまり関わりたくない」など、自分が自分だけで存在していると考えがちで、自分が支えられて生きていることを自覚しておらず、伝統を支える地域の人たちの苦労や郷土への思いを十分に理解していない。

■教材の分析
- 東日本大震災で被災し、地元保存会の復活を目指すから地域芸能を復活させた津軽石中学校の生徒たちの姿から、地域の伝統や文化の継承について考えることができる教材である。
- 衣装づくりや練習がうまくいかない時の思いを考えることで、伝統芸能を復活させたいという願いがある一方で、困難にめげそうになる気持ちや不安等、多様な思いに気付けるようにしたい。
- すべての演目が終わったあとに沸き起こった大きな拍手、笑顔、涙を拭う人々を見て主人公たちがどんなことを感じたのかを考えることで、地域の文化を自分たちの手で引き継ぐことの喜びとその大切さに気付けるようにするとともに、郷土の一員として行事に積極的に参加しようとする実践意欲と態度に繋げたい。

■ねらい
郷土芸能の復活や継承には、様々な不安や困難を乗り越える生徒や保存会の人たちの、地域に対する強い願いがあることに気付き、地域の文化の伝承に自分たちが関わる重要性を理解することで、自分も郷土の一員として行事に積極的に参加しようとする実践意欲と態度を育てる。

■展開の構想
- 教材の伝統芸能を視聴し、本時の学習の見通しをもつ。
- 郷土芸能を復活させる決意をしたものの、思ったように進まず、不安や困難にめげそうになる気持ちを、共感的に理解する。
- 郷土を愛し、地域の発展のために貢献したいという、中学生たちの強い気持ちについて考える。
- 地域行事を例示し、自分がどのような気持ちで参加してきたかを振り返り、地域と自分の関わりについて考える。

■基本発問（◎中心発問）
○「法の協奏曲り」とはどんな踊りなのでしょう。
○郷土芸能を復活させたいという思いがありながらも、衣装づくりや練習がどうなかなうまくいかなかったさ、生徒たちはどんな気持ちだったのでしょう。
◎すべての演目が終わった後、大きな拍手、涙を拭う人や笑顔の人を前に、長洞くんたちはどんなことを考えたのでしょう。
○これまで自分が地域とどのように関わってきたかを見つめ、これからの自分について考えましょう。

授業構想の手順

ポイント 1　「価値の分析」

本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

■内容項目
C―(16)　郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度

郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。

【内容項目について大切にしたいこと】

郷土によって育まれてきた伝統と文化に触れ、体験することを通して、そのよさに気付き、郷土に対する誇りや愛着をもち、郷土に対して主体的に関わろうとする意欲と態度を育てること。

ポイント 2　「実態と要因の分析」

「価値の分析」を基にした児童生徒の実態と授業者の願いから、指導の要点を明らかにします。

【生徒の実態と要因】

○よさ：地域のよさや温かさを実感し、行事に積極的に参加する生徒が多い。
○課題：地域で行われる行事の意味や歴史について考えることなく、気軽に楽しむだけで、なんとなく行事に参加する生徒もいる。
○要因：地域の行事にどのような意味や歴史があり、どんな思いで運営されているか考えたことがなく、地域の人たちの苦労や思いを十分に理解していない。

【実態から育成したいこと】

地域の行事は、ただ楽しいだけのものではなく、運営する人の郷土の発展や人々のつながりを大切にしたいと願う気持ちが込められているものであることに気付き、そうした人々に感謝の思いをもつことも、自分も郷土の一員として行事に積極的に関わろうとする実践意欲や態度。

ポイント 3　「教材の分析」

考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討します。

あらすじ

- 東日本大震災での被災により、中断した伝統芸能発表を復活させたいという声が生徒から挙がる。
- 衣装づくりや練習が始まるが、初めてのことで戸惑ったり、保存会の人との時間がかかり練習が思うように進まなかったりするなど様々な苦労や困難に見舞われる。
- 少しずつ練習を積み重ね、ついに披露することができた。その発表は、保存会や地域の人から喝采を浴び、生徒も自分たちの手で伝統を受け継いだ達成感を抱く。さらに後輩にも引き継いでほしいという願いをもつ。

ポイント 4　「考え、議論したいこと」

「価値」「実態と要因」「教材」の分析を受け、**考え、議論したいこと**を明確にします。

考え、議論したいこと

なぜ自分たちの手で伝統を伝えることが大切なのかについて。

5　「ねらい」の設定

【ねらい】

郷土芸能の復活や継承には、様々な不安や困難を乗り越える生徒や保存会の人たちの、地域に対する強い願いがあることに気付き、地域の文化の伝承に自分たちが関わる重要性を理解することで、自分も郷土の一員として行事に積極的に参加しようとする実践意欲と態度を育てる。

6　「本時の展開の構想」

指導方法の工夫
- 「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など

本時の展開

	基本発問と予想される生徒の反応	指　導・援　助
導入	1　教材に関心をもち、本時の見通しをもつ。 ○「法の脇鹿踊り」とはどんな踊りなのでしょう。 ・かなり動きが激しい踊り。太鼓のリズムも速い。 ・東日本大震災で被災し、住むことができなくなり、消滅するところだったけれど、「法の脇」という地名を残したいという地域の人の強い思いがこもったものなんだな。 ・中学生が衣装づくりから始めたなんてすごいな。	・自分たちの地区の伝統芸能について尋ね、つながりを想起できるようにする。 ・宮古市の位置を確認し、東日本大震災で被災してから「法の脇鹿踊り」が復活するまでの経緯を取材した動画を視聴し、「郷土の伝統芸能」について関心を高められるようにする。
展開前段	2　教材「震災を乗り越えて」を読み、話し合う。 ○郷土芸能を復活させたいという思いがありながらも、衣装づくりや練習がなかなかうまくいかなかったとき、生徒たちはどんな気持ちだったのでしょう。 ・自分たちにできるのか不安だ。 ・作ったことがない1・2年生もいるし、自信がない。 ・途絶えさせたくないけれど、あきらめそうになるな。 ◎すべての演目が終わった後、大きな拍手、涙を拭う人や笑顔の人を前に、長洞くんたちはどんなことを考えていたのでしょう。 ・苦労したけれど、やって本当に良かった。 ・保存会の人もこんなに喜んでくれている。うれしい。 ・自分たちの力で復活させることができた。同じ思いでがんばってくれる仲間たちがいたからだ。後輩にも絶対引き継いでほしい。 **【深めるための補助発問】** ○地域の人は、長洞くんたちの発表を見て、どんなことを考えたでしょう。 ・大人がなかなかできなかったことを、中学生がやってくれた。驚いたけれど、うれしい。ありがとう。 ・「守りたい」という思いで、これまで大切にしてきて 本当に良かった。中学生の力は大きいな。 ・感動した。また、改めてこの踊りは地域の誇りと呼べる素晴らしいものだと思った 。これからも、地域全体で守っていきたい。	・保存会との連携がうまくいかない状況、初めてでなかなか進まなくてあきらめそうになる気持ちへの共感的な理解を促し、引き継ぎたい思いはあるものの拭えない不安や苦悩について、様々な思いを考えられるようにする。 ・地域の人、後輩、自分自身に対してなど、いろいろな視点からの思いを考えることにより、地域の人への感謝の思いや地域を誇りに思う気持ちを抱いていることに気付けるようにする。 ・長洞くんの「自分たちの手で伝えてほしい」という言葉を取り上げ、その理由を考えられるようにする。 ・「深めるための補助発問」をすることで、地域の人の伝統芸能を守りたいと願う強い思いや、中学生の手で引き継がれたことに対する喜びについて気付けるようにするとともに、その価値について考えられるようにする。 **【評価の視点】** **伝統芸能を引き継ぐ意義や喜び、苦労について理解し、その発展に努めることの価値について考えている。** ①
展開後段	3　高められた価値観から自己を見つめる 。 ○これまで自分が地域とどのように関わってきたかを見つめ、これからの自分について考えましょう。 僕はこれまで、単に地域の行事は楽しいもので、何も深く考えずに参加していた。しかし 、今日の学習で、中学生が地域のために自分たちで動き出し、伝統を引き継いでいたことを知り、すごく驚き自分も何ができるだろうと考えた。これまで、たくさん地域にお世話になってきたので、これからは、地域の行事やボランティアに自分から積極的に参加していきたい。	・自分たちの地域の行事や伝統文化について尋ねたり、その写真を提示したりしてその時の自身の様子と思いについて想起させるとともに、本時の学習につないで振り返りができるようにする。 ・地域の方のインタビューを視聴し、その思いを改めて感じ、自分ができることを実践していこうという意欲につなげる。 **【評価の視点】** **「地域との関わり 」について、これまでの自分を見つめながら、これからの自分について考えている。** ②
終末	4　教師の説話を聞く。	・校内で地域行事に主体的に関わり続けている先輩の声を紹介し、その思いを広げる。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

郷土芸能の復活や継承には、様々な不安や困難を乗り越える生徒や保存会の人たちの、地域に対する強い願いがあることに気付き、地域の文化の伝承に自分たちが関わる重要性を理解することで、自分も郷土の一員として行事に積極的に参加しようとする実践意欲と態度を育てる。

評価

1 【評価の視点】の位置付け

ポイント

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

【評価の視点】
① 伝統芸能を引き継ぐ意義や喜び、苦労について理解し、その発展に努めることの価値について考えている。

【評価の視点】
② 「地域との関わり」について、これまでの自分を見つめながら、これからの自分について考えている。

2 「児童生徒の姿・発言」を想定

ポイント

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

想定する「具体的な学習状況」

① 伝統文化を守るということは、達成感を味わえるだけでなく、地域の人が涙を流すほど喜ぶくらい大きな意味があるのだと分かった。地域みんなで守る大切なものなんだな。

② これまでは行事を楽しむために参加しているだけだった。しかし、様々な人の思いが詰まっているし、これまで地域に本当お世話になってきたから、自分も積極的に関わりたい 。

3 「評価の視点」に基づいた指導の工夫

ポイント

【評価の視点】に基づいた、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

発問の工夫 ①

「道徳的価値の意義や大切さの理解」ができるようにするために…

発問「すべての演目が終わった後、大きな拍手、涙を拭う人や笑顔の人を前に、長洞くんたちはどんなことを考えていたのだろう。」

・自分の達成感はもちろんのこと、地域の人の郷土を思う気持ちに気付いたり、後輩に託したい思いが湧いたりしたことなど、多様な視点からの思いが出せるようにする。

深めるための補助発問「地域の人は、長洞くんたちの発表を見て、どんなことを考えたでしょう。」

・地域の人の思いを考えることで価値に迫り、郷土の一員として主体的に関わろうとする実践意欲につなげる。

学習活動の工夫 ②

「自己を見つめること」ができるようにするために…

本時の学びと自分のこれまでの生活を関わらせながら振り返る。

・導入で想起した地域の行事について、これまでの参加状況やその時の思いなど、自分がどのように地域と関わってきたかを振り返り、これから、郷土のために何ができるか考え、進んで関わっていこうという実践意欲や態度につながるようにする。

指導

主題名　懸命に生きる
教材名　「命を見つめて―猿渡 瞳さんの六百四十六日―」
（日本文教出版「中学道徳　あすを生きる②」）

主題構成表

■内容項目
D―（19）生命の尊さ
　生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。

■価値の分析
・生命を尊ぶことは、かけがえのない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることに素直に応えようとする心の現れと言える。
・中学生の時期は、比較的健康で毎日を過ごせる場合が多いため、自己の生命に対する有り難みを感じている生徒は決して多いとは言えない。
・生命を尊ぶためには、まず自己の生命の尊厳、尊さを深く考えることが重要である。
・生命にいつか終わりがあることなどを改めて考えることを通して、自らの生命の大切さを深く自覚させるとともに、他の生命を尊重する態度を身に付けさせることが大切である。

■内容項目から見た生徒の実態
・育てている植物や飼育している身近な生き物の生命を大切にすることができる生徒が多い。
・一方で、そうした生命の尊さへの気持ちが乏しく、身近な生命に関心が低い生徒の姿も見られる。
・また、日常生活で、相手の気持ちを考える意識が低い生徒もおり、仲間へのからかいや暴はずみな発言も見受けられる。その中には、自他の生命を軽視した言動も見受けられる。

■要因
・身近な人の死に接したり、人間の生命の有限さやかけがえのなさに心を揺り動かされたりする経験が少なく、かけがえのない自他の生命を尊重するということの理解が十分ではない。

■教材の分析
・小学6年生の時に「右大腿骨骨肉腫」という診断を受けた。当初からも46日との間、がんと闘った猿渡瞳さんの半生から、限りある生命を精一杯生きることの大切さについて考えることができる教材である。
・「今のままでは命は半年しかない」と宣告された時の瞳さんの気持ちを考えることを通して、瞳さんが、受け入れがたい現実に直面し、辛さや悲しみに苛まれていることに気付けるようにしたい。
・瞳さんの、全身ががんにむしばまれている中でも、治療方針について医師と話し合い、懸命に精一杯生きようとする思いや、「本当の幸せに対する考えについて考えることを通して、限りある生命を精一杯生きることができるかけがえのない生命を尊重することにつながると気付き、生きていることの有り難さに深く思いを寄せ、自他の生命を尊重しようとする心情につなげたい。

■ねらい
生命にいつか終わりがあることを改めて理解し、苦しみの中にあっても限りある生命を精一杯生きることがかけがえのない生命を尊重することにつながると気付き、自らの生命の大切さを深く自覚し、自他の生命を尊重しようとする心情を育てる。

■展開の構想
・猿渡瞳さんについての紹介を聞き、本時の価値の方向を理解する。
・病気のことを聞き、辛さや悲しみに苛まれているであろう瞳さんの気持ちに共感する。
・諦めずに精一杯生きようとする瞳さんの思いを考えることを通して、限りある生命を精一杯生きることがかけがえのない生命を尊重することにつながると気付く。
・本時考えたことを基に、生命との向き合い方や生き方について、これまでの自分を振り返るとともに、これからの自分について考える。

■基本発問（◎中心発問）
○「猿渡瞳さん」とはどんな人なのでしょう。
○瞳さんの生き方で、すごいと思うところはどこですか。
○お母さんから病気のことを聞き、涙をぐっとがんばって落ちていた時、どんな思いが込み上げていたのでしょう。
◎治療方針について、自分の考えや思いを伝え、医師と話し合う瞳さんは、どんな気持ちだったのでしょう。
○「生命を大切にする」とはどういうことか、これまでの自分を振り返り、これからの自分について考えましょう。

授業構想の手順

ポイント 1 「価値の分析」
本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

■内容項目
D―（19）生命の尊さ
　生命の尊さについて、その連続性や有限性など も含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。

【内容項目について大切にしたいこと】
生命にいつか終わりがあることを改めて考えることで、自らの生命の大切さを深く自覚するとともに、他の生命を尊重して生きようとする心情を育てること。

ポイント 2 「実態と要因の分析」
「価値の分析」を基にした児童生徒の実態と授業者の願いから、指導の要点を明らかにします。

【生徒の実態と要因】
◇よさ：育てている植物や飼育している身近な生き物の生命を大切にすることができる生徒が多い。
◇課題：相手の気持ちを考える意識が低く、仲間へのからかいや軽はずみな発言も見受けられる。その中には、自他の生命を軽視した言動も見受けられる。
◇要因：自分たちの生命の有限性や連続性について深く考えるきっかけとなるような経験が少なく、かけがえのない自他の生命を尊重するということの理解が十分でない。

【実態から育成したいこと】
限りある生命を精一杯生きることが、かけがえのない生命を尊重することにつながると気付き、生きていることの有り難さに深く思いを寄せ、自他の生命を尊重して生きようとする心情。

ポイント 3 「教材の分析」
考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを分析します。

あらすじ
・小学6年生の時に、「右大腿骨骨肉腫」という診断を受け、「今のままでは命は半年しかない」と宣告される。
・過酷な治療に耐えたことで、奇跡的回復力を見せ、小学校の卒業式に出席する。その過酷な治療期間中、自らの治療方針について、自分の考えや思いを伝え、医師と話し合う。
・中学2年生の時に、がんに全身をむしばまれている中で、市の弁論大会の学校代表に選ばれ、毎晩、原稿と必死に向き合い続ける。そして、弁論大会当日、「ふつうに生きることの幸せとの命の尊さ」について訴える。

・実態と要因から中心的に取り上げたい場面・
瞳さんが、治療方針について、自分の考えや思いを伝え、医師と話し合う場面。

ポイント 4 「考え、議論したいこと」
「価値」「実態と要因」「教材」の分析を受け、考え、議論したいことを明確にします。

・考え、議論したいこと・
生命にいつか終わりがあることを理解した上で、かけがえのない自他の生命を尊重して生きていくとはどういうことなのかについて。

5 「ねらい」の設定

【ねらい】
生命にいつか終わりがあることを改めて理解し、苦しみの中にあっても限りある生命を精一杯生きることがかけがえのない生命を尊重することにつながると気付き、自らの生命の大切さを深く自覚し、自他の生命を尊重して生きようとする心情を育てる。

6 「本時の展開の構想」

指導方法の工夫
・「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など

本時の展開

	基本発問と予想される生徒の反応	指　導　援　助
導入	1　教材に関心をもち、本時の見通しをもつ。 ○「猿渡瞳さん」とはどんな人なのでしょう。 ・小学６年生の時に、「右大腿骨骨肉腫」という診断を受け、「今のままでは命は半年しかない」と宣告される。 ・過酷な治療に耐え、告知から６４６日に及ぶ闘病生活ののち、中学２年生で亡くなった。	・生徒と同じ、「中学２年生」で亡くなった瞳さんの生き方について考えていくことで、「生命の尊さ」について考えるという本時の価値への方向付けを行う。
展開前段	2　教材「命を見つめて」を読み、感じ合う。 ○瞳さんの生き方で、すごいと思うところはどこですか。 ・病気のことを聞いてすぐに、「お母さんがかんじゃなくて、私で本当によかった」と思えるところ。 ・骨肉腫との闘病生活さえも、多くの人の痛みを理解することができる機会になったと考え、「骨肉腫ありがとう」と語れるところ。 ○お母さんから病気のことを聞き、涙がとめどなく落ちている時、どんな思いが込み上げていたのでしょう。 ・どうして私が死ななくてはいけないのだろう。 ・死にたくない。まだ小学６年生なのに……。 ○治療方針について、自分の考えや思いを伝え、医師と話し合う瞳さんは、どんな気持ちだったのでしょう。 ・自分の身体と命のことなのだから、自分で考え、自分で決めたい。（がんだから仕方ない）と諦めてしまいたくない。 ・たった０．１パーセントの可能性であっても、希望が残っている限り、それを信じて闘いたい。 **[深めるための補助発問]** 『私の心はがんに侵されてないから幸せ』とは、どういうことなのでしょう。 ・「生きる」ということを諦めず、命の大切さを実感し、今を精一杯生きている自分は幸せな生き方をしているのだということ。たとえ五体満足でも、命の大切さに気付いていない人は「がんが侵されている」から幸せとは思えない。	・教材を読む前に、瞳さんの生き方について、「すごい」と思ったところを見つけるように投げかけ、価値理解に迫るための視点を焦点化する。 ・瞳さんでさえ、「今のままでは命は半年しかない」と言われた当初は、辛さや悲しみに苛まれていることに気付けるようにし、瞳さんへの共感的な理解を促す。 ・生徒から、「がんに負けない」という希望に向かう強い意志や、支えてくれる家族への感謝などの思いが強く出てきた時は、それらの素様な価値を認めつつ、ねらいとする「生命の尊さ」に結び付けるようにする。 **[評価の視点]** **「かけがえのない生命を尊重する」とはどのようなことかを考えている。** ① ・「深めるための補助発問」をすることで、がんと闘う苦しみの中にあっても、精一杯生きていることそこそ、幸せを感じている瞳さんの思いを確認する。
展開後段	3　高められた価値観から自己を見つめる。 ○「生命を大切にする」とはどういうことか、これまでの自分を振り返り、これからの自分について考えましょう。 ・これまで、「生きている」ということの有り難さについて真剣に考えることはほとんど無かった、けれど、今、自分たちが生きていることは当たり前ではないということを改めて理解したので、悔いのないよう、精一杯生きていきたい。 ・けんかをしたときなどに、すぐに生命を軽視するような言葉を言ってしまうことがある、よくないことだとは分かっていたけれど、改めて、それがどれだけひどいことかを考えたので、生命を大切にする言葉を心がけたい。	・弁論大会での瞳さんの実際のスピーチを聞き、「今生きていることに感謝し、精一杯生きていくことが、かけがえのない生命を尊重することである」という瞳さんの思いを確認することで、これをもとに振り返ることができるようにする。 **[評価の視点]** **「生命を大切にする」ということについて、これまでの自分を見つめながら、これからの自分について考えている。** ②
終末	4　教師の説話を聞く。	・自分だけでなく、周りの人も同じように、限りある生命を精一杯生きていることに気付く説話をする。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

生命にいつか終わりがあることを改めて理解し、苦しみの中にあっても限りある生命を精一杯生きることがかけがえのない生命を尊重することにつながると気付き、自らの生命の大切さを深く自覚し、自他の生命を尊重して生きようとする心情を育てる。

評価

1　【評価の視点】の位置付け

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な「評価の視点」を設定します。

ポイント

① **【評価の視点】**
「かけがえのない生命を尊重する」とはどのようなことかを考えている。

② **【評価の視点】**
「生命を大切にする」ということについて、これまでの自分を見つめながら、これからの自分について考えている。

2　「児童生徒の姿・発言」の想定

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

ポイント

想定する「具体的な学習状況」

① 「生きる」ということを諦めず、命の大切さを実感し、今を精一杯生きているからこそ、瞳さんは、「自分は幸せな生き方をしている」と感じているのだと思う。

② これまで、「生きている」ということの有り難さについて真剣に考えることはほとんど無かった、けれど、今、自分たちが生きていることは当たり前のことではないことを改めて理解したので、自分の人生に悔いのないよう、精一杯生きていきたい。

3　「評価の視点」に基づいた指導の工夫

【評価の視点】に基づいた、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

発問の工夫 ①

「道徳的価値の意義や大切さの理解」ができるようにするために…

発問「治療方針について、自分の考えや思いを伝え、医師と話し合う瞳さんは、どんな気持ちだったのでしょう。」

・がんと闘う苦しみの中にあっても、限りある生命を精一杯生きていこうとしていることに気付けるようにする。

深めるための補助発問「『私の心はがんに侵されてないから幸せ』とは、どういうことなのでしょう。

・精一杯生きることが、生きていくうえで一番大切なものだと考えている瞳さんの思いに気付き、そうした生き方こそが、生命を尊重することだと考えられるようにする。

学習活動の工夫 ②

「自己を見つめること」ができるようにするために…

本時の学びを、これからの自分の生活と関わらせながら振り返る。

・猿渡瞳さんが実際に弁論大会で語ったスピーチの音声（原稿）を聞き、「今生きていることに感謝し、精一杯生きていくことが、かけがえのない生命を尊重することである」という瞳さんの思いを確認し、これをもとにこれまでの自分を振り返ることで、「生命の尊さ」について深く考えることができるようにする。

指導

主題名　周りへの感謝
教材名　「塩むすび」

（日本文教出版「中学道徳　あすを生きる③」）

主題構成表

■内容項目
B－(6) 思いやり、感謝
思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。

■価値の分析
・感謝の心は、主として他者から受けた思いやりに対する人間としての心の在り方である。人間は、互いに助け合い、励まし合って生きている。その関係を根底で支えているのは、互いの感謝の心である。人がおのずと感謝の念を抱くのは、他者の思いやりに触れ、それを有り難いと感じ、素直に受け止めたときである。そして、自分が感謝するのは、多くの人々によって支えられてきたからであることを自覚するようになる。
・感謝の心は、他者との関わりに始まり、多くの人々への感謝へと次第に広がっていく。
・思いやりや感謝の気持ちを言葉や行動にて素直に表そうとする心が、今自分が相手に対して何をもって応答することができるかを考えさせ、結果として自己と他者との心の絆をより強くするのだということに気付かせたい。

■内容項目から見た生徒の実態
・仲間のために進んでプリント等を配付したり、困っている仲間に優しく声をかけたりするなど、他者のことを考えた思いやりのある姿が見られる。
・進路選択への不安などから、周囲の思いやりに目を向けることができないことがある。また、支えに気付いていても、感謝の気持ちを言葉や行動にして表現することに弱さがある。

■要因
・自分のことに気を取られ、周囲の思いやりに目を向けることができないことがある。
・支えられていることに気付き、有り難いと思っていても、照れくさかや恥ずかしさなどから、感謝の気持ちを素直に伝えるに至らない。

■教材の分析
・避難所での生活の中で、利己的、自己中心的にならずに一人一人の立場や状況を理解しようとする、良事情での経験を通して、心情が変化していく主人公の様子から周囲への思いやりと感謝について考えることのできる教材である。
・主人公は、母に促され、良事情を担当することになるが、転校先の中学校が決まり、不安も募る中で、周囲の思いやりに気付いたり、それに感謝したりすることができずにいる。しかし、良事情の経験を通して、周囲に目を向けることができるようになっていく。主人公の捉える「新しい世界」について考え、自分も他者も、共にかけがえのない存在であることに気付けるようにしたい。
・周囲に感謝して行動に移そうとしている主人公や、朝の残業をほとんどしなくなった人々について考えることを通して、他者の思いやりに触れて感謝し、感謝の気持ちを言葉や行動にて表そうとする実践意欲や態度につなげたい。

■ねらい
誰もが状況によって利己的、自己中心的になるが、共にかけがえのない存在であることに気付き、他者の思いやりの心に触れて感謝し、感謝の気持ちを言葉や行動にて表そうとする実践意欲や態度を育てる。

■展開の構想
・伸句を通して、本時の価値の方向を理解する。
・避難所生活の不安などから、周囲の思いやりに気付いたり、それに感謝したりすることができない主人公の弱さに共感する。
・「新しい世界」について交流し、自分も他者も、共にかけがえのない存在であることについて考える。
・他者の思いやりを有り難いと感じ、素直に受け止め、感謝の念を抱いている私や、周囲の人々も感謝し、その気持ちを行動に表しているのではないかということを想起し、道徳的価値に迫る。
・自分を見つめ、自己を振り返るとともに、これからの自分の生き方について考える。

■基本発問（◎中心発問）
○伸句中の「ふにしみる塩むすび」とはどういうことでしょう。
○母に良事情を頼まれたとき、私はどんなことを思ったでしょう。
○「良事情で新しい世界を知った」とは、私のどのような思いが込められているでしょう。
◎「温かさが体中にしみ渡る」とは、どういうことでしょう。
○「周りへの感謝」について、自己の行動を振り返り、これからの自分について考えましょう。

授業構想の手順

ポイント 1 「価値の分析」
本時で扱う内容項目について、授業者が特に大切にしたいことを学習指導要領解説等を基に明らかにします。

■内容項目
B－(6) 思いやり、感謝
思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。

【内容項目について大切にしたいこと】
思いやりの心をもって人と接するとともに、他者の思いやりの心に触れて感謝し、感謝の気持ちを言葉や行動にて表そうとする実践意欲や態度を育てること。

ポイント 2 「実態と要因の分析」
「価値の分析」を基にした児童生徒の実態と授業者の願いから、指導の要点を明らかにします。

【生徒の実態と要因】
○よさ：仲間のために進んでプリント等を配付したり、困っている仲間に優しく声をかけたりするなど、他者のことを考えた思いやりのある姿が見られる。
○課題：進路選択への不安などから、周囲の思いやりに目を向けることができないことがある。また、支えに気付いていても、感謝の気持ちを言葉や行動にて表現することに弱さがある。
○要因：自分のことに気を取られ、周囲の思いやりに目を向けることができないことがある。また、支えられていることに気付き、有り難いと思っていても、照れくさかや恥ずかしさなどから、感謝の気持ちを素直に伝えるに至らない。

【実態から育成したいこと】
自分も他者も共にかけがえのない存在であることに気付き、他者の思いやりの心に触れて感謝し、感謝の気持ちを言葉や行動にて表そうとする実践意欲や態度。

ポイント 3 「教材の分析」
考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討します。

あらすじ

・東日本大震災で被災した主人公が、避難所での良事情での経験を通して人との関わりや支え合うことを学び、成長していく。
・最初、母に良事情を促された際には、前向きに取り組むことができなかったが、関わり続ける中で視野が広がり、支えてくれている人の思いに応えることの大切さに気付く。
・主人公も避難所にいる人々も温かい塩むすびに感謝し、思いやりの心をもって行動しようとする。

・実態と要因から中心的に取り上げたい場面
温かい塩むすびを一口頬張り、「その温かさが体中にしみ渡る」と主人公が思っている場面。

ポイント 4 「考え、議論したいこと」
「価値」「実態と要因」「教材」の分析を受け、考え、議論したいことを明確にします。

・考え、議論したいこと・
周囲に目を向け、他者の思いやりの心に触れて感謝するとともに、相手に対して何をもって応答することができるかについて。

5 「ねらい」の設定

【ねらい】
誰もが状況によって利己的、自己中心的になるが、共にかけがえのない存在であることに気付き、他者の思いやりの心に触れて感謝し、感謝の気持ちを言葉や行動にて表そうとする実践意欲や態度を育てる。

6 「本時の展開の構想」

指導方法の工夫
・「発問の工夫」・「学習活動の工夫」など

本時の展開

	基本発問と予想される生徒の反応	指導・援助
導入	1　教材に関心をもち、本時の見通しをもつ。 ○俳句中の「心にしみる塩むすび」とはどういうことでしょう。 ・塩むすびがおいしくて、感動した。 ・被災した時に、塩むすびを作ってもらえて嬉しい。	・避難所の背景について触れる。 ・俳句を紹介することで、教材への関心を高める。
展開前段	2　教材「塩むすび」を読み、話し合う。 ○母に食事係を頼まれたとき、私はどんなことを思ったでしょう。 ・行くのが面倒くさい。 ・母がいけばいい。だれかがやってくれるからいい。 ・中学校に通わなくてはいけない。→時間がない。 ・知らない人ばかりだから関わりにくい。 ○「食事係で新しい世界を知った」とは、私のどのような思いが込められているでしょう。 ・食事係の人がみんなのことを考えて協力している。私の知らないところで気を配り、活動している人がいる。 ・自分だけが不安なわけではない。周囲の頑張りに支えられている。私も何かをしなくては。 ◎「温かさが体中にしみ渡る」とは、どういうことでしょう。 ・こんなに温かくて、おいしい塩むすびを食べることができるのは、おばさんたちのおかげ。 ・食事係のおばさんたちの頑張りに支えられて、今の自分がある。新しい学校では、私が誰かのために頑張りたい。 【深めるための補助発問】 「温かい塩むすびに感謝したのは私だけではなかったようだ」とは、どういうことでしょう。 ・食事係の思いやりに対して感謝した人たちが、その気持ちを「残菜をできるだけ減らす」という行動で表そうとしたのではないか。	・主人公が私であることを明示する。 ・食事係を頼まれた時の私の利己的、自己中心的な気持ちを交流し、私の弱さに気付けるようにする。 ・「新しい世界」について、私の思いを問うことで、自分も他者も、共にかけがえのない存在であることに気付けるようにする。 ・避難所で温かくておいしい塩むすびを食べることができていること、食事係を通して自分が成長できたことなど、他者の思いやりを有り難いと感じ、素直に受け止め、感謝の念を抱いていることを考え、価値理解や他者理解を図る。 【評価の視点】 「感謝」について、様々な立場から考えようとしている。① ・私だけではなく、周囲の人々も温かい塩むすびに感謝し、残菜を減らすことで感謝の気持ちを行動に表しているのではないかということを想起できるようにし、価値理解を深められるようにする。
展開後段	3　高められた価値観から自己を見つめる。 ○「周りへの感謝」について、自己の行動を振り返り、これからの自分について考えましょう。 ・中学校生活の中で、友人や地域の方、先生方など、様々な人たちからの思いやりを受け取っているが、恥ずかしい思いがあり、感謝を伝えることができなかった。今からでも、きちんと伝えていきたいと思った。 ・校門で毎朝挨拶してくれている生徒会の人たちに、急で寒くなった次の日などは面倒くさそうな態度で接してしまうことがある。一日が気持ちよくスタートできるように毎朝頑張ってくれる仲間を大切にし、気持ちよく挨拶を返したい。	・本時の道徳的な価値に基づいて「これまでの自分」「今の自分」「これからの自分」という視点で振り返りをするように促す。 【評価の視点】 「周りへの感謝」について、これまでの自分を見つめながら、これからの自分について考えている。②
終末	4　教師の説話を聞く。	・感謝の気持ちを素直に伝えたことで、結果として心の絆をより強くしたことについて話をする。

指導と評価の一体化

本時の「ねらい」

誰もが状況によって利己的、自己中心的になるが、共にかけがえのない存在であることに気付き、他者の思いやりの心に触れて感謝し、感謝の気持ちを言葉や行動にして表そうとする実践意欲や態度を育てる。

評 価

1 【評価の視点】の位置付け　ポイント

道徳的諸価値を理解し、道徳的価値観を形成するための、具体的な【評価の視点】を設定します。

① 【評価の視点】
「感謝」について、様々な立場から多面的・多角的に考えようとしている。

② 【評価の視点】
「周りへの感謝」について、これまでの自分を見つめながら、これからの自分について考えている。

2 「児童生徒の姿・発言」を想定　ポイント

【評価の視点】を基に、「児童生徒の姿・発言」を具体的に想定します。

想定する「具体的な学習状況」

① こんなに温かくて、おいしい塩むすびを食べることができるのは、食事係のおばさんたちのおかげ。おばさんたちの頑張りに支えられて今の自分があるので、新しい学校で、誰かのために頑張りたい。

② 中学校生活の中で、友人や地域の方、先生方など、様々な人たちからの思いやりを受け取っているが、恥ずかしい思いがあり、感謝を伝えることができなかった。今からでも、きちんと伝えていきたいと思った。

3 「評価の視点」に基づいた指導の工夫　ポイント

【評価の視点】に基づいた、「道徳的価値の意義や大切さの理解」「物事を多面的・多角的に考えること」「自己を見つめること」等から、具体的な指導の工夫を考えます。

発問の工夫 ①

「物事を多面的・多角的に考えること」ができるようにするために…

発問「「温かさが体中にしみ渡る」とは、どういうことでしょう。」
・他者の思いやりの心に触れて感謝し、感謝するからこそ他者の立場を尊重し、今後につなげようとする私の思いを考えることができるようにする。

深めるための補助発問「「温かい塩むすびに感謝したのは私だけではなかったようだ」とは、どういうことでしょう。」
・思いやりと感謝の心が、多くの人たちへの感謝へと次第に広がり、残菜を減らすという行動に繋がっていると捉えている主人公の気持ちに気付くことができるようにする。

学習活動の工夫 ②

「自己を見つめること」ができるようにするために…

本時の学びと自分のこれまでの生活を関わらせながら振り返る。
・本時の道徳的な価値に基づいて「これまでの自分」「今の自分」「これからの自分」という視点で振り返りをするように促す。

指 導